

# まちづくりにおける“地域カリスマ”の超利他的動機の規定要因に関する実証的研究\*

An empirical study on determinants of super altruistic motivation in a local community development by “regional charismas”\*

住永哲史\*\*・羽鳥剛史\*\*\*・藤井聡\*\*\*\*

By Tetsushi SUMINAGA\*\*・Tsuyoshi HATORI\*\*\*・Satoshi FUJII\*\*\*\*

## 1. はじめに

まちづくりや地域づくりを成功へと導く上で、地域に対して献身的に振る舞い、地域の問題解決に向けて熱意を持って取り組むごく一部の人々、場合によってはたった“一人”の人の存在が極めて重要であることが経験的に知られている。例えば、国土交通省では、「従来型の個性のない観光地の魅力を高めるためには、観光復興を成功へと導いた人々の類まれな努力に学ぶことが極めて重要である」との認識の下、「『観光カリスマ百選』選定委員会」を設立し、その先達となる人々を『観光カリスマ百選』として選定している<sup>1)</sup>。

このような「地域のカリスマ」による地域に対する献身的な振る舞いは、そうした「カリスマ」がたった一人で多大なる個人的負担を犠牲にしても、地域全体の厚生を向上させるという意味において、「超」利他的動機に基づく行動であると言えるだろう。そして、そうした超利他的動機に基づいて行われる地域に対する献身的な振る舞いは、地域コミュニティの存続を支える重要な要件であり、「地域コミュニティ保守行動」と呼ぶことが出来よう。

こうした「地域カリスマ」による地域コミュニティ保守行動が当該地域の存続を支え、まちづくりや地域づくりの成功の鍵を握っているのであれば、そうした人々の動機や行動に影響を与える要因を明らかにすることは、今後、地域計画の在り方を検討する上でも重要な示唆を与えるものと期待される。

以上の問題意識の下、本研究では、「地域カリスマ」の地域コミュニティ保守行動、及び、それを支える超利他的動機の規定要因を探ることを目的とする。この目的の下、利他的行動の規定要因に関する既往研究よりその要因を整理し、それらの要因を用いて、既出の「観光カ

リスマ」を対象としたアンケート調査を実施した。

## 2. 利他的行動の規定要因に関する既往研究

利他的行動や協利行動の規定要因については、これまで社会心理学等の分野において、ボランティア活動や援助行動、環境配慮的行動等を対象とした多くの研究が蓄積されている。本研究ではまず、既往研究で検討されてきた利他的行動や協利行動の規定要因について、既存の関連理論を基に、(a) 規範活性化要因、(b) 合理的要因、(c) 集団帰属要因、(d) 他者との関係要因、(e) その他の要因の5つのアプローチに分類して整理した。その結果を表-1に示す。

## 3. アンケート調査概要

「カリスマ」による地域コミュニティ保守行動の規定要因には、「カリスマ」自身の人格や資質に関わる内在的な要因と、「カリスマ」が活動する地域環境に関わる外在的な要因が存在するものと考えられる。本研究では、前者を「地域コミュニティ保守行動の人格的要因」、後者を「地域コミュニティ保守行動の環境的要因」と呼び、それぞれの要因を明らかにするため、「観光カリスマ」「観光カリスマ居住地周辺住民」「その他の地域の住民」を対象としてアンケート調査を実施した。そして、前者2つのグループを対象とした比較検証を通じて人格的要因について検討し、後者2つのグループを対象とした比較検証を通じて、環境的要因について検討することとした。

### (1) 調査対象・時期

『観光カリスマ百選』で選定されている「観光カリスマ」95名、観光カリスマ居住地周辺住民400名、全国の電話帳から無作為に抽出した住民500名を対象とした（以下、それぞれ単に「カリスマ」、「カリスマ周辺住民」、「その他の住民」と呼称する）。調査は、郵送配布・郵送回収で行った。調査票の発送は2008年7月3日に行い、回収締切りは、7月18日とした。回答者数は全体で375名（回収率38.6%、男性323人、女性49人、性別

\*キーワード：計画基礎論，地域計画，観光カリスマ

\*\*正員，工修，(株)大林組生産技術本部

(東京都港区港南2-15-2，TEL:03-5769-1314，

E-mail:suminaga.tetsushi@obayashi.co.jp)

\*\*\*正員，工博，東京工業大学大学院理工学研究科

\*\*\*\*正員，工博，京都大学大学院工学研究科

表-1 利他的行動の規定要因

要因	関連理論・内容
(a)規範活性化要因	規範活性化理論(Schwartz,1977)
規範活性化要因 <sup>(+)</sup>	責任帰属の認知, 対処有効性認知, 実行可能性認知より構成される(広瀬, 1994; 野田・亀田・山添, 2000; 杉浦, 2003; 藤井, 2003) ( $\alpha=.82$ )
(b)合理的要因	合理的の行為理論(Fishbein & Ajzen,1975), 葛藤理論(Janis & Mann,1977)
便益評価 <sup>(+)</sup>	行動の結果に対する評価(広瀬, 1994; 杉浦, 2003; 加藤・池内・野波, 2004; 元吉・高尾・池田, 2004). (本研究アンケート調査ではまちの取り組みに携わることによる, 費用と便益を“どの程度感じるか「認知」(費用: $\alpha=.67$ , 便益: $\alpha=.82$ )”, 及びそれが“望ましいかどうか「評価」(費用: $\alpha=.67$ , 便益: $\alpha=.83$ )”の指標を測定した.)
費用評価 <sup>(-)</sup>	
リスク認知 <sup>(+)</sup>	不確実な事象に対する主観的確率や損失の大きさの推定, 不安や恐怖, 楽観, 便益, 受入れ可能性などの統合された認識. “発生可能性”と“深刻度”より構成される. (広瀬, 1994; 加藤・池内・野波, 2004)
問題回避不可能性 <sup>(+)</sup>	地域の問題からの逃れ難さに対する認知(Aronson,1992)
(c)集団帰属要因	社会的アイデンティティ理論(Tajfel,1981; Tajfel & Turner,1986), 階層淘汰理論(Sober & Wilson,1998)
帰属意識 <sup>(+)</sup>	個人が地域に対して抱く情緒的なつながり(安藤・広瀬, 1999; 加藤・池内・野波, 2004) ( $\alpha=.85$ )
愛着 <sup>(+)</sup>	慣れ親しんでいる人や物に心を引かれ, 離れがたく感ずること(加藤・池内・野波, 2004)
組織コミットメント <sup>(+)</sup>	特定の組織に対する帰属意識や組織との関わりの相対的強度(高橋, 1997; 奥井, 2003) ( $\alpha=.74$ )
流動性 <sup>(-)</sup>	内・外集団間をどの程度行き来できるか(垂澤・広瀬, 2006)
集団淘汰圧 <sup>(+)</sup>	階層淘汰論における淘汰の階層であり, 個人間で作用する個人淘汰と集団間で作用する集団淘汰の大きく2つに分けられる(羽鳥・藤井, 2008). (本研究アンケート調査では淘汰のメカニズムとして“競争”(集団淘汰: $\alpha=.60$ , 個人淘汰: $\alpha=.61$ )と“模倣”(集団淘汰: $\alpha=.75$ , 個人淘汰: $\alpha=.72$ )を想定した.)
個人淘汰圧 <sup>(-)</sup>	
(d)他者との関係要因	社会的ネットワーク理論(Granovetter,1973)
社会的ネットワーク <sup>(+)</sup>	近所の人とどの程度お付き合いしているかという「近隣交際」と, どのくらいの地域の団体に所属しているかという「所属集団」より構成される(野田・亀田・山添, 2000)
共感 <sup>(+)</sup>	他者が苦しんでいるのを目にして, 不快な生理的の反応を経験する傾向(Aronson,1992)
共通運命感 <sup>(+)</sup>	閉ざされた環境がもたらす同じ興味や関心, 同じ喜び, 同じ苦難, 同じ環境条件を共有している人々の間で芽生える相互性の感情(Aronson,1992)
社会適応機能 <sup>(+)</sup>	社会的つながりを維持できること, 友人を得る機会が得られること等(西川・高木, 2000; 坂野・矢嶋・中嶋, 2004) ( $\alpha=.82$ )
他者の喜び <sup>(+)</sup>	ボランティア活動によって周囲の人々が喜ぶこと(塚本, 2006)
役立つことの嬉しさ <sup>(+)</sup>	人々の役に立つことがうれしいという感情(塚本, 2006)
感謝 <sup>(+)</sup>	他者からの感謝の有無(藤井・松山, 2005)
(e)その他の要因	
興味・関心 <sup>(+)</sup>	地域の問題にたいする興味や関心(塚本・霜浦・山添・野田, 2004; 元吉・高尾・池田, 2004)
感情的安寧 <sup>(+)</sup>	ボランティア活動に参加することによってネガティブな自己像やプライベートな問題といった脅威から自己を守ることができること(西川・高木, 2000; 坂野・矢嶋・中嶋, 2004) ( $\alpha=.81$ )

(+): 正の要因, (-): 負の要因 引用文献は紙面の都合上割愛する. 質問項目の詳細については, 羽鳥・藤井・住永<sup>2)</sup>を参照のこと.

不明3名, 平均年齢64.02歳, 年齢標準偏差10.98歳)であり, その内訳は, 「カリスマ」58名(回収率62.4%, 男性53人, 女性5人, 平均年齢63.35歳, 年齢標準偏差8.13歳), カリスマ周辺住民139名(回収率35.5%, 男性123人, 女性14人, 性別不明2名, 平均年齢63.56歳, 年齢標準偏差12.25歳), その他の住民178名(回収率36.6%, 男性147人, 女性30人, 性別不明1名, 平均年齢64.59歳, 年齢標準偏差10.78歳)であった.

(2) 調査項目

a) 利他的動機

調査対象者の利他的動機の指標を測定するために, 「お住まいのまちの中の誰か一人が, 身を粉にして熱心に取り組めば, “まち全体が活性化され, 豊かになる”」という仮想的な状況を想定してもらった上で, “このような状況下で, あなた自身は, 「自分の収入が減っても, まち全体のために熱心に働こう」と思いますか?”という質問を設定し「全く思わない」から「とて

も思う」までの5段階で回答を要請した.

b) 利他的動機の規定要因

利他的動機の規定要因として, 表-1で整理した既往研究で提案されている要因に関する質問項目を設定し, 各要因の指標を測定した.

4. 結果

(1) 利他的動機の比較

グループ間における利他的動機の差異を検証するために, 「利他的動機」についての回答結果から, グループを要因とした一元配置分散分析を行った. その結果を表-2の最上段に示す. 表-2の結果より, 利他的動機に関しては, グループ間で1%水準で統計的に有意な差が確認された. そこで, 多重比較(Bonferroni法)を行ったところ, 「カリスマ」とカリスマ周辺住民, 及び, 「カリスマ」とその他の住民との間でそれぞれ0.1%水準で有意な差が見られた. この結果より, 「カリスマ」

はカリスマ周辺住民やその他の住民に比べて利他的動機が高い水準にあることが改めて確認された。

### (2) 利他的動機の規定要因の比較

次に、利他的動機の各規定要因について、「カリスマ」、カリスマ周辺住民、その他の住民の3つのグループごとの回答結果を比較した。その結果を同様に表-2に示す。

表-2 利他的動機の規定要因のグループ間比較

変数	F	カリスマ			カリスマ周辺住民			その他の住民		
		N	M	SD	N	M	SD	N	M	SD
利他的動機	F[2, 368]=34.91***	58	3.98 <sub>a</sub>	1.03	138	2.82 <sub>b</sub>	1.05	175	2.65 <sub>b</sub>	1.09
【規範活性化要因】										
規範活性化要因	F[2, 362]=42.24***	58	4.52 <sub>a</sub>	0.64	136	3.47 <sub>b</sub>	0.91	173	3.38 <sub>b</sub>	0.81
【合理的要因】										
便益享受認知	F[2, 352]=29.40***	55	4.12 <sub>a</sub>	0.65	132	3.35 <sub>b</sub>	0.77	168	3.28 <sub>b</sub>	0.71
便益享受評価	F[2, 330]=21.28***	52	4.02 <sub>a</sub>	0.71	127	3.37 <sub>b</sub>	0.72	154	3.34 <sub>b</sub>	0.64
費用負担認知	F[2, 351]=2.17	56	3.03	1.03	134	3.23	0.78	164	3.29	0.76
費用負担評価	F[2, 318]=5.76**	50	3.07 <sub>a</sub>	0.62	123	2.79 <sub>b</sub>	0.63	148	2.73 <sub>b</sub>	0.64
リスク認知(発生可能性)	F[2, 366]=3.98*	58	4.16 <sub>a</sub>	1.11	136	3.71 <sub>b</sub>	1.18	175	3.69 <sub>b</sub>	1.11
リスク認知(深刻度)	F[2, 365]=3.25*	57	3.95 <sub>a</sub>	1.20	135	3.55	1.23	176	3.47 <sub>b</sub>	1.27
問題回避不可能性	F[2, 367]=21.74***	58	4.81 <sub>a</sub>	0.44	136	4.17 <sub>b</sub>	0.85	176	3.95 <sub>b</sub>	0.96
【集団帰属要因】										
帰属意識	F[2, 367]=25.95***	58	4.44 <sub>a</sub>	0.82	136	3.70 <sub>b</sub>	0.99	176	3.40 <sub>b</sub>	0.97
まち愛着	F[2, 364]=18.95***	56	4.71 <sub>a</sub>	0.53	135	4.16 <sub>b</sub>	0.90	176	3.88 <sub>b</sub>	0.98
地域愛着	F[2, 360]=12.73***	56	4.63 <sub>a</sub>	0.52	136	4.04 <sub>b</sub>	0.92	171	3.92 <sub>b</sub>	0.99
組織コミットメント	F[2, 266]=19.11***	53	4.42 <sub>a</sub>	0.53	99	3.91 <sub>b</sub>	0.76	117	3.66 <sub>b</sub>	0.79
流動性	F[2, 358]=1.93	56	3.57	1.06	135	3.48	1.04	170	3.31	0.98
集団淘汰(競争)	F[2, 357]=2.66	56	3.82	0.62	135	3.58	0.85	169	3.53	0.87
集団淘汰(模倣)	F[2, 366]=4.03*	58	3.61 <sub>a</sub>	0.66	136	3.37	0.79	175	3.29 <sub>b</sub>	0.74
個人淘汰(競争)	F[2, 354]=5.05**	56	3.91 <sub>a</sub>	0.72	134	3.67	0.80	167	3.51 <sub>b</sub>	0.89
個人淘汰(模倣)	F[2, 350]=7.12**	56	3.42 <sub>a</sub>	0.69	131	3.06 <sub>b</sub>	0.76	166	2.99 <sub>b</sub>	0.73
【他者との関係要因】										
お付き合いの人数	F[2, 359]=39.44***	57	5.25 <sub>a</sub>	1.07	134	3.96 <sub>b</sub>	1.27	171	3.50 <sub>b</sub>	1.37
加入団体グループ数	F[2, 372]=10.27***	58	2.83 <sub>a</sub>	1.45	139	2.23 <sub>b</sub>	1.33	178	1.95 <sub>b</sub>	1.19
共感	F[2, 365]=18.35***	58	4.19 <sub>a</sub>	0.87	136	3.65 <sub>b</sub>	0.93	174	3.27 <sub>b</sub>	1.14
共通運命感	F[2, 366]=8.13***	58	3.86 <sub>a</sub>	1.08	136	3.32 <sub>b</sub>	1.11	175	3.14 <sub>b</sub>	1.27
社会適応機能	F[2, 369]=7.41**	58	3.64 <sub>a</sub>	0.78	137	3.38	0.79	177	3.18 <sub>b</sub>	0.85
他者の喜び	F[2, 369]=16.75***	58	4.07 <sub>a</sub>	0.81	137	3.40 <sub>b</sub>	0.95	177	3.25 <sub>b</sub>	0.96
役立つことの嬉しさ	F[2, 370]=27.31***	58	4.47 <sub>a</sub>	0.54	138	3.67 <sub>b</sub>	0.83	177	3.54 <sub>b</sub>	0.92
感謝	F[2, 360]=5.88**	56	3.88 <sub>a</sub>	0.76	134	3.43 <sub>b</sub>	0.94	173	3.44 <sub>b</sub>	0.88
【その他の要因】										
興味関心	F[2, 366]=27.52***	58	4.53 <sub>a</sub>	0.68	135	3.86 <sub>b</sub>	0.87	176	3.51 <sub>b</sub>	1.01
感情的安寧	F[2, 350]=6.62**	51	3.24 <sub>a</sub>	0.80	133	2.91 <sub>b</sub>	0.80	169	2.76 <sub>b</sub>	0.85

N = サンプル数, M = 平均値, SD = 標準偏差  
p \* < .05 \*\* < .01 \*\*\* < .001  
多重比較 (Bonferroni法) の結果, アルファベットの異なるところで5%水準以上の有意差あり (a > b > c)

表-2の結果より、既往研究で検討されている多くの項目において、グループ間での回答の差異が存在することが統計的に示された。そこで、利他的動機と同様に多重比較 (Bonferroni法) を行ったところ、ほとんどの項目において「カリスマ」とカリスマ周辺住民との間に有意差が見られた。これらの結果は、それら各変数が「カリスマ」に固有の人格的要因であることを示唆していると考えられる。さらに、帰属意識、まち愛着、組織コミットメント、お付き合いの人数、共感については、カリスマ周辺住民とその他の住民との間にも有意差が見られた。この結果は、これらの各変数が「カリスマ」の居住する地域に固有の環境的要因であることを示唆している。

### (3) ロジスティック回帰分析

次に、以上で検討した項目の内で、「カリスマ」の

行動と直接的に関連する要因を抽出するために、各グループのダミー変数を従属変数、利他的動機の各規定要因を独立変数とするロジスティック回帰分析を実施した。

#### a) 「カリスマ」とカリスマ周辺住民の比較

まず、「カリスマ」自身に関わる人格的要因を探るため、「カリスマ」とカリスマ周辺住民の2グループのみを対象として (その他の住民は分析から除外)、「カリスマ」である回答者を1、そうでない場合を0とするダミー変数を作成し、これを目的変数として、本研究で尺度化した要因を説明変数とするロジスティック回帰分析を行った。説明変数の選択については、5%の有意水準を想定した尤度比によるステップワイズ変数増加法により行った。その結果を表-3に示す。

表-3 ロジスティック回帰分析結果

(カリスマとカリスマ周辺住民の比較)

従属変数: カリスマダミー

独立変数	回帰係数	標準誤差	オッズ比	有意確率
規範活性化要因	0.441*	0.188	1.554	.019
便益享受認知	0.360*	0.151	1.433	.017
定数	-11.987	2.953	0.000	<.001

従属変数の値 (1=カリスマ, 0=カリスマ周辺住民)

$\chi^2 = 27.65^{**}$  (p < .01), n = 79, \* p < .05

表-3の結果より、「カリスマ」の直接的規定要因として規範活性化要因、便益享受認知が抽出された。この結果は、道徳意識活性化の水準の高さとまちの取り組みに携わることに対する便益の認知が、「カリスマ」の人格特性と直接的に関連する人格的要因を構成していることを示唆している。

#### b) カリスマ周辺住民とその他の住民の比較

次に、「カリスマ」の居住する地域の特性と直接的に関連する環境的要因を探るため、カリスマ周辺住民とその他の住民の2つのグループに属する回答者のみを抽出した。そして、カリスマ周辺住民である回答者を1、そうでない回答者を0とするダミー変数を作成し、これを目的変数として、本研究で尺度化した要因を説明変数とするロジスティック回帰分析を行った。その結果を表-4に示す。

表-4 ロジスティック回帰分析結果

(カリスマ周辺住民とその他の住民の比較)

従属変数: カリスマ周辺住民ダミー

独立変数	回帰係数	標準誤差	オッズ比	有意確率
共感	0.581**	0.209	1.787	.005
定数	-2.304	0.788	0.100	.003

従属変数の値 (1=カリスマ周辺住民, 0=その他の住民)

$\chi^2 = 8.65^{**}$ , n = 120, \*\* p < .01

表-4の結果より、カリスマ周辺住民の規定要因として共感が抽出された。この結果は、周囲の人々と喜びや苦難を共感する傾向が高いことが、「カリスマ」の居住する地域特性と直接的に関連する環境的要因となってい

ることを示唆している。

## 5. 考察

本研究では、利他的行動や協力行動に関する既往研究を基に、「カリスマ」とカリスマ周辺住民、及び、その他の住民を対象としたアンケート調査を行い、地域コミュニティ保守行動の規定要因について実証的に検討した。まず、利他的動機について調べたところ、「カリスマ」はカリスマ周辺住民やその他の住民に比べて利他的動機が高い水準にあることが確認された。この結果より、地域の「カリスマ」は、仮に大幅な利己的損失を被らざるを得ないとしても、それを厭わず、地域に対して献身的に振る舞う心的傾向が強いことが改めて確認された。

次に、既往研究で検討されている利他的行動の規定要因について「カリスマ」、カリスマ周辺住民、その他の住民間で回答結果を比較した。その結果、既往研究において検討されている利他的行動の規定要因の多くにおいて、「カリスマ」とカリスマ周辺住民との間で有意な差異が確認された。その中でも「カリスマ」の人格特性と直接的に関連する規定要因を探るために、ロジスティック回帰分析を実施したところ、規範活性化要因と便益享受認知の二つの要因が抽出された。これらの要因はそれぞれ社会的な要因（social factors）と個人的な要因（individual factors）であると解釈可能である。この点を踏まえれば、以上の結果は、「地域カリスマ」において、地域のために貢献すべきであるという社会的規範に従おうとする社会的要因と、そうした地域貢献に対する「カリスマ」自身の便益に関わる個人的要因とがお互いに必ずしも相矛盾するものではなかった、という可能性を含意するものと考えられる。すなわち、「カリスマ」において、そうした社会的な要因と個人的な要因がお互いに整合的に働き、共に地域コミュニティ保守行動の支えとなっていた可能性が考えられる。そうした可能性の一つの解釈として、地域のために尽力する「カリスマ」は、その高い道徳意識故に、地域のために相当な労力と個人的負担を被ることを一人ででも引き受けようとするとともに、そうした労力を通じて、地域に貢献できることに對して喜びを見出している、と言い換えることも可能ではないかと考えられるところである。一般にボランティア・ジレンマを含めた社会的ジレンマ状況は公益と私益の対立状況と定義されているが<sup>3)</sup>、この結果は、一般には社会的ジレンマと見なされる状況が「カリスマ」にとっては主観的には社会的ジレンマ状況では既くない、という可能性を示唆するものとも考えられる。

次に、集団帰属や他者との関係性に関わる要因等については、「カリスマ周辺住民」とその他の地域住民の間でも有意な差異が認められた。これらの項目が、「カ

リスマ」の居住する地域に関わる環境的要因を構成するものと考えられる。以上の要因の中でも「カリスマ」の居住地域と直接的に関連する環境的要因を探るために、ロジスティック回帰分析を実施したところ、そうした要因として共感が抽出された。この結果より、地域住民の間で喜びや苦難を共有し合う精神的風土が醸成されていることこそ、「カリスマ」発生地域の直接的な要件となっている可能性が示されているものと考えられる。

最後に、地域コミュニティ保守行動の自発的な発生の促進について、本研究結果が示唆するところを考察することとする。

第一に、地域計画においては、少なくとも、以上で検討したような「地域カリスマ」の人格的要因を阻害することのないように十分に配慮する必要があるであろう。ここで、本研究で検討した規範活性化要因が「カリスマ」の人格や資質と直接的に関連する要因であることが示されている。そしてその規範活性化要因は責任帰属の認知、対処有効性認知、実行可能性評価から構成されており、この点を踏まえれば、地域計画を検討する上では、地域の問題を引き受けようとする「カリスマ」の責任感や、地域の問題に自分が貢献できるという認識、そしてそうした行動が実行可能であるという認識に対して十分に配慮することが重要である、ということが考えられる。また、本研究では、「カリスマ」の人格や資質に直接的に関連する要因として、規範活性化要因に加えて便益享受認知が確認された。ここで、少なくとも、「カリスマ」が地域のために取り組むことから便益を感じているという事実を踏まえるなら、そうした便益についても何らかの配慮を施していくことは、「カリスマ」の持続的な活動を支援するにあたって、一定の意義が存在するものと考えられる。

第二に、「カリスマ」の生じる地域環境的要因を整えることが重要であると考えられる。本研究では、住民同士の「共感」が地域コミュニティ保守行動の環境的要因を構成していることが示されており、そうした要因に働きかけることによって、地域コミュニティの基盤を整えることが、「カリスマ」の自発的な発生を促進する上で重要であるものと考えられる。

### 参考文献

- 1) 国土交通省『観光カリスマ百選』ホームページ：  
[http://www.mlit.go.jp/sogoseisaku/kanko/charisma\\_index.html](http://www.mlit.go.jp/sogoseisaku/kanko/charisma_index.html)
- 2) 羽鳥剛史・藤井聡・住永哲史：地域コミュニティ保守行動の規定要因に関する実証的研究：地域カリスマによる超利他的動機の人格的要因と環境的要因、実験社会心理学研究、2009（投稿中）。
- 3) 藤井聡：社会的ジレンマの処方箋：都市・交通・環境問題のための心理学、ナカニシヤ出版、2003。